『それを伺つて見るんですわ！』

いつの間にか彼女と並んで、雪の中を滅茶々々に歩いてゐた私は、此時口で彼女に答へる代りに突如彼女の手袋の穿まつた手をしつかり握りしめてやりました。

すると其儘私の方へ倒れかゝるやうにして、ぢつと私の手を握り返した彼女はやがて『誰かが！』と囁くやうに申しまする。見れば成る程向うの方から、白い雪の上を黑い蟲のやうに見えるものが動いて居りまする。

『隱れよう！』と同じく囁くやうに言ひ乍ら私は、流石に躊躇してゐる彼女の肩に手をかけ、丁度道傍に立つてゐた材木置場の中へ連れてはひりました。

そして暫く經つてから私達二人が外へ出て見ると、先刻蟲のやうに見えて居つた人間は反對の方角に再び蟲位に小さくなつて動いて居りました。そして、入口の前の一層明るくなつた光が、雪の上を照り返して參りまする。二人の目にはひどくまばゆく感じたものでございまする。さてこれより後、機會のある度毎に呼び出したり押し掛けて行つたりして、私が人目を忍んでまで植村の娘貞代に會つてゐましたのは、恐らく御推察を仰ぐことが出來ようと思ひまする

式を擧げるまでと云つてももうあと一二ヶ月の事ゆゑ、成るべくは世間の目を憚るやうにしたいと云ふ、至極最もな貞代の言葉に對し、もう一二ヶ月すればどの道許される事を、さうまで遠慮しないでもと云ふ私の我儘や、少くとも貞代の母は薄々私達二人の祕密を感付きながら、知らぬ顏をしてゐてくれたことや、これらの事も詳しくは申述べませぬ。

兎に角、斯うして日の經ちまする內に、私はもう餘事を顧みられない位に、殆んどその戀の奴隷とでも申すやうなことになつてしまひました。そこでそれほどにまでになつて參りまするとと共に不思議や、長らく忘れて居りました戶籍問題が、またまた氣になり出してございまする。

卽ち、一應は誤魔化し得たる戶籍面ながら、いつまでも尻尾が出ないで濟むものかどうか。萬々一公文書僞造の顚末まで暴露してしまつたらどうであらう？　いやそれよりも、前科三犯と云ふ此淺ましい正體が、むき出しになつてしまつたらどうであらう？

今あれほどに私が思つて居り、またあれほどに私を思つて吳れても居る女が、その時どう思ふであらう？　どう言ふであらう？　いやどうなつてしまふであらう？

斯う考へて來ると、なまなかにこんな緣談が持上がつたり、こんな仲になつたりしないでゐた方が、まだしもよかつたやうにさへ思はれて來るのでありまする。

加之、皆樣への手前もお恥づかしい位に、生眞面目な惚れかたをしてしまひました私は

將來を思ふにつけても、私自身よりもあの女の事が一層心にかゝるのでございまする。

即ち、私のやうな者の妻と呼ばれ、私のやうな者の子供を生んだり育てたりして行つてゐる内に、私の正體が暴露されてしまつたらばどうであらう？　彼女はどんなに氣の毒な事になるであらう？。

いや、ようく考へて見れば、萬一の場合が氣の毒なだけではない。よし現在の誤魔化しがその儘にばれないで行つてくれようとも、そんな人間を良人にもつて、なんにも知らずに欺かれた一生を送るといふ事は、それだけでも何だか此上もなく氣の毒なことではないか？　私としては全く忍びない事ではないか？

斯様に考へた私は、斷然女との關係をたち緣談をも解約にして貰はうと、幾度か決心して見たのでありまするが、決心したばかりでは何にもなりませぬ。實行の段になつて、いつもぐにやりとなつてしまふのでございまする。

しかし乍ら、最後には斯う云ふことに分別をつけました——

何よりも先づ、あの女に私自身の正體を暴露して見よう。さうすれば、どんな女でも考へ直すであらうし、諦めるべき事は諦めるであらう、そして其結果は私自身にも別れて行く勇氣が出て來さうなものだと。

そこで三月の末頃の事でございまする。大至急に會つて相談せねばならぬ問題が起つたから、自分の處へ來てくれと申す手紙を、いつもの通り子供に賴んで貞代の處へ屆けて置きまするとと、其夜の十時過ぎ、都會でならば眞夜中のやうなものでございまする。家人の寢靜まるのを待ち受けて家をぬけ出し、貞代は私の處へ來てくれました。

突如ぶちまけてしまふ積りに覺悟をしてゐたのではありますが、顏を見ると矢張り其覺悟も役に立たなくなりました。そして例のやうな話ばかりして居りまするとと、貞代の方から遂に切り出したのでございまする——

『一體どんなお話でしたの？——至急に相談したいと仰しやつたのは』

『あゝ、あれか。別に大した問題ぢやなかつたんだ』

『さうですか』

『やつぱり、何とかかとか理窟を附けて、呼び出して見たのさ。顏が見たかつたのさ』

『また、あんな事ばつかし』

それから再び、何でもない、愚にもつかないやうな話をし合つて居りましたが、女はなたもや思ひ出したやうに申しまする——

『貫郎は、何か隱してゐらつしやるのね？——きつと』

『隱してゐる？　何故？』
『でも、御顏の色が平生のやうではないんですもの』
『さうかなあ』
『本當に惡いわ。本當にどうかしてゐらしやるわ』
私ももう仕方がないと思ひました。そして次ぎのやうに切り出しました——
『實はね。此間中から或る友人の事で、私の親友中の親友なんだが、その事で非常に考へ込んでゐたんだよ』
『それは又、どんな事ですの？』
『一口に云ふと、その私の親友と云ふのは、近々に細君を貰ふことになつてるんだが——丁度私達のやうにね。ところが彼は、その細君になる人へそれまで打ち明けよう打ち明けようと思ひ乍ら、どうしても打明けられないでゐた秘密があるんだ』
斯う言つて一寸言葉をきつた私は、貞代がそれをどう聞いてくれるかを見ようと致しました。けれども彼女は、私の手にしてゐた煙管のさきをぢいと見入り乍ら、只だ熱心に聞いてゐるばかりで、格別何とも申しませず、格別の變つた樣子をも示しませぬ。そこで私は其儘に言葉を續けて申したのであります——

『そして其秘密の爲めに、私の友人はどれだけ苦しんだか解らない。人知れずどんなに情けない思ひをしたか、どんなに……』
『其秘密と仰しやるのは？』と貞代は、眞正面に私の顏を見守りながら訊ねまする。私は目をつぶつて、目をつぶつたやうな心持で申しました——
『その秘密と云ふのは他でもない。所謂新平民の家に生れたんだ。穢多の子なんだ——私の友人は！』
貞代は微かに太息を洩らしたやうでありますが、依然として何とも申しませぬ。ただ次第に頭を垂れて來た丈けで、いつまで經つても默つて居ります。その沈默が私には堪へ難く感じられまするので、それを打ち破る爲めかのやうに、我ながら妙に周章へた、調子つぱづれな聲で言葉をつぎました——
『この秘密を打明けた方がよいか惡いか。いや、それはもう問題ぢやないが、貞代さんはどう思ふ？——その秘密を打ち明けられた場合細君は、私の友人の細君になるべき人はどう言ふだらうか。どうするだらうか。ねえ、貞代さん！　その人は私の友人との約束を、取消したいと言ふだらうか？』
『そんな、そんな事は……』と貞代ははじめて口をきき、又もや前よりも大きく太息を洩

らしました。

『そんな事は言はない？　と言つてくれるんだね！』

『いくらなんでも、そんな事は仰しやるまいと思ひます』

『貞代さん！　よく言つて呉れた。其一語をきいた丈けでも、これまでのありとあらゆる苦みは、その苦みを私の友人は、みんな忘れてしまへるだらう。また自分から別れて行かうと云ふ勇氣も出るだらうな』

『なぜ、その御二人は御別れにならなくちやならないでせう？』

『なぜ？　なぜ、別れなくちやならないのか？』

『えゝ』

『秘密はもう一つあるんだ――もつと大きな、もつと恐ろしい！』

『さうですか』

私は起つて、梯子段の降口の處まで行つて階下の様子をうかがひ、引き返して來て半ば立膝をしながら申しました――

『貞代さんは、法律の網にかかり刑罰に處せられたやうな人間の妻になれますか？』

『えっ！』

『竊盜前科三犯と云ふ恐ろしい肩書き附きです。その恐ろしい肩書きを取り除く爲めに戸籍面をまで誤魔化してゐるんです』

『そ、それは、何方の事ですか？』

『何方の事？』

『私はそれとも、勘違ひして聞いてゐたのでせうか？』

『貞代さん！　もうそんな事を言はないで呉れ。友人でも何でもない、私自身が、この私と云ふ人間が――』

『さうですか』と早口に私の言葉を奪ひ取るやうに申した貞代は、眞蒼な顏をして胸を撫でながら、更に言葉をついで申しまする。『やつぱり、さうですか！』

『今更、貴女に對してお詫びをして見たところで仕方がない。切めては、まだ公然の式を擧げないでゐたのが、まだしもの事だつたと思つて下さい』と、暫く經つてから私は申しました。けれども貞代は何とも申しませす、たゞ苦しげに胸の上を撫でてゐるばかりでございまする。

『惡い夢を見たんだと思つて諦めて下さい。さう思つて諦められなければやつぱりあいつの爲めにこんな目に遭つたと思つて、いつまでも私を憎んで下さい！』と重ねて私は申し

ました。

これに對しても依然として默つてゐました貞代は、やがて左の手で額を押へながら、疊の上へ突伏してしまひまする。私は驚いて『苦しいのか？』とたづねますと、微かにうなづいて『えゝ、少し何だか！』と申しまする。

人のゐない階下から、冷水をコップに入れて持つて來てやりまするとそれを一口飲んで、少し氣持がよくなりましたか、片手をついて半分ばかり身を起しました。そして俯向いた儘に申しまする――『私は、私は一體どうしたらいいでせうか？』

私には彼女の言つた言葉の意味が分りませぬ。そして『何か藥でも上げようか』と申しまするとと、彼女はそれには答へないで斯う申します――

『私は馬鹿ですから、何にも分らないんですから……だけど、貴郎の仰とやることはあんまりだと思ひますわ！』

『私の言ふことが、あんまり――』と申しながら、私は彼女が泣いじやくりしてゐるのに氣付いて口をつぐみました。

『貴郎に別れることなんぞ、私は！　私は！』

女は子供が駄々を捏ねる時のやうに斯う言つて、再び疊に突伏してしまひ、それから無

茶苦茶に泣き出しました。私も何か言ひましたけれど、そんな言葉が耳にはいらないほどに泣いて泣いて泣きぬいて居りまする。

はじめの内、不思議な物でも見るやうに茫然として見てゐた私も、何時の間にか彼女の上半身を膝の上に横へさせてゐました。そして其季節の着る物を通してさへ、熱い涙が全身に染み渡つたときは、私自身も生れてこの方まで一遍も流したことのないやうな、熱い涙をぼろぼろと留度もなく彼女の上へ流してゐたのでございまする。

女の興奮の稍や鎭まつた處で、否私自身のいくらか落ちついて來たところで、私は今一度女の冷靜な考をきかうとしました。冷靜に考へ直して見るやうにと申しました。

けれども女は、冷靜に考へることは出來ないと申しまする。又、いくら冷靜に考へ直して見ても、冷靜に考へ直して見れば見るほど、今更私と別れることは出來ないと申しまする。

『それぢや、こんな恐ろしい前科者を、いや前科どころぢやない、現に戸籍まで僞つてゐる人非人を、恐ろしいとは思はないのか』と、私が最後に念を押したのに對して彼女は、『思ひません』と答へ、『そんな事を、これから爲さらうと仰しやるんぢやないんですから』と答へましたが、その時の彼女は瞼をこそ泣き腫らしてゐたれ、もう泣いじやくりすること

も何も止めてしまつて、生來の低い聲ながらはつきりした口の利きかたをしてゐたのでございまする。

やがて私は彼女を送つて出で、彼女の家の土藏の横で別れたのでありまするが、愈々別れる前に今一度顏を見ようとして引き寄せまするとと、例の梨の木の葉を洩れて來る月光をさへ避けるやうにしながら、『まだ申上げたい事があるんですけども……私は駄目なんですから、口で言へないんですから』と呼きました。あとから思ひ合せれば、これこそ私が此世で聞いた彼女の最後の言葉だつたのでございまする。

さて其夜、私が自分の寓所へ引き返して來てから何を考へたか、東の天の白むまでどんなに嬉しい夢を覺めながら見てゐたか、翌日も引きつづきどんなに夢のやうな心持で過ごしてゐたか、それらの事は一に御賢察を願ひまする。

越えて其翌日には午前中に貞代の方から用事を拵へて一寸でも來て呉れる筈でありましたが、お晝を過ぎてもやつて參りませぬ。午後は詮方なく公務を果す爲め外出致し、日暮れに歸つて來たのでありまするが、留守中にも彼女の來た樣子はありませぬ。

少し氣になりまするので、手紙でも持たせてやつて見ようと思ひ、服をぬぎかへ、机に向つてゐるところへ突然に、〇〇〇と申す私の管内唯一の旅人宿から、直ぐに來てくれと

申して迎へに參りました。

私服の儘で駈けつけて見ると、宿の主人は、怪しげな客が飛び込んだので、氣味が惡いので、一應調べて貰ひたいのだと申しまする。どう怪しいかと申すのに、客の入浴中その脫ぎ捨てた着物を何氣なく家人が動かしたところ、その中に客の服裝不相應な金時計や、寶石入かなんぞらしい立派な指環が六個まで發見されたと申すのでございまする。又それから宿の長男が特別に注意してゐると、きたない木綿足袋の底から、紙幣のやうな物を取出したと申すのでございまする。

尙ほ色々の事をも申しまする故、兎も角も其怪しい客なるものを取調べて見ました。そして取調べて見ると、成程粗末な金時計だけは一つ持つて居りましたが、指環なぞは一つも持つて居りませぬ。足袋の底に拾圓紙幣七枚ばかり入れてゐることはゐましたが、道中用心の爲めと申し立てるのでございまする。

ただしそれらの點以外、人相言葉訛り等に於て、豫て御探ねものになつてゐる漢を、幾分聯想させるところもありまするし、且つ又私が精一杯寬大にやつてゐまするにも拘はらず、職務執行の妨害と見做すべき行動をしきりに致しまするので、かたがたこれを駐在所へ連れ歸り、翌朝に至つて〇〇〇警察署へ護送しましてございまする。

さてそれから引き返して參りまするとと、又あとに厄介な事件が待ち受けて居りました。それは先づかの特殊部落に於けるチブスの疑ひある病人が、愈々眞正のチブスと確定したに付いては、然るべく處置をつけねばならぬと申す次第なのでございまする。

尙ほ引き續いては隣村との境になつてゐるところに一名の行倒れが發見され、その扱ひ方について頗ぶる馬鹿々々しい面倒を生じましてございまする。

そんなこんなで私は、前後五日間と云ふもの殆んど不休不眠に動き廻りまして、六日目の朝久し振りにほつと息をつき、それまでにも氣になつてたまらなかつた貞儀のところへ手紙を書きました。そしていつも使を賴む子供のやつて來るのを待ち乍ら、其日の新聞を讀んでゐました。

ところが如何でございませう！――其新聞にまた、私の胸をドキツとさせる樣な記事が載つてゐたのでございまする。

新聞も地方の小新聞の事なり、隨分いゝ加減な物らしいのは勿論ながら、兎に角それに依れば、先日私が〇〇〇署へ護送して置いた男は、前科二犯の曲者で、少くとも最近數回の强盜を働いてゐるらしく、尙ほ〇〇〇署で申し立てた(？)所に依れば、幾年前かに朝鮮より馬關への船中に於て、一旅客を海中に投げ込み、其所持品等を盜んだと云ふやうな、

容易ならざる犯罪もあるらしいとのことでございまする。

此記事の特に後半部を讀んで、如何に私が驚かされたかは、一に御賢察に委せまする。私の現在名乘つてゐる宇田川信造も、四五前朝鮮よりの歸航中、何人かに依つて殺害されたものらしいと、さうなつてゐるではありませぬか！

勿論、かの男が實際に左樣の犯罪をなしたものであるや否やは分りませぬ。またよし、彼が實際に左樣の犯罪をしたのであらうとも、それが丁度宇田川信造の事件であるや否やは分りませぬ。しかし乍ら、斯樣なる犯罪事件にして問題にされるならば、宇田川信造の件も、當然蒸し返されないで濟むわけはありませぬ。さすれば私の戸籍面の誤魔化しなぞも、どうして其儘にされてゐませうぞ？　どうして馬脚を露はさずにゐることが出來ませうぞ？

それに何よりも私の氣になつたのは、右の如き漢が人もあらうに、丁度私の手に取押へられたと云ふ點であります。

これはきつと因緣事に違ひない。右の漢はたしかに信造を殺したものであり、その信造の靈が自分に右の漢を捕へさしたものに違ひない！

――と、今日より考へれば馬鹿々々しい話でございまするが、其時の私は遂に全くその

やうに考へ出したのでございまする。

斯く考へ込んで居りまする處へ、例の子供が貞代からの手紙を持つて來て吳れました。取急ぎ開いて見まするとこれが又容易ならぬ手紙であります。

あの日必ず來るつもりでゐたのに、前夜からの齒痛で頰がすつかり脹れ上つたほどで、遂に來られなかつたといふこと、それから愈々痛みが激しくなり、今以てなんにも食べないで臥てゐると云ふこと、それらは先づよいとして私の跳び上るほどに驚いたのは、いつぞや私の處へ妙な手紙が舞ひ込んだごとく、今度は貞代の處へ氣味の惡い手紙が舞ひ込んだと申す一件であります。

貞代の手紙に同封されてゐた其の氣味惡き手紙は、明かに私の處へ來たのと同一の筆蹟でございまする。それに依れば、宇田川巡査は鄕里の村役場に勤めてゐる人間と共謀の上ある不正の金儲けをしてゐる。その證據はもう自分の手にちやんと握つてゐる。しかし、自分は好んで法律上の罪人なぞを出すつもりでないから、自分の忠告をきき、宇田川巡査との結婚はやめにした方が、雙方の爲め得策であらう云々と申すのであります。

これに對して貞代は、どうも察するところ、隣村の郵便局員なる某といふ男の所業らしいと申して居りまする。不心得な郵便局員が郵便物を開いて見るのは、往々ある事のやうである。そして其男は、これまで貞代を妻に貰ひたいと、手をかへ品をかへて申込んでゐたとのことでございまする。

兎もあれ、此怪しげなる手紙は、かの新聞記事以上に私を威嚇しました。一口に申せば私はもうこれまでかと云ふやうな氣になつたのであります。

そこで、植村の家へ貞代を見舞ひに行くと云ふ勇氣も出ず、何とか言つてやらうにも言つてやりやうがなく、途方にくれ乍らころがつてゐますると、其日の午後の三四時頃、〇〇署から署長の名前で直ぐに來いと電報でございまする。

その電報を受取ると共に、何の理由もなく私は、愈々最後が來たなと感じてしまひました。そして咽嗟の間に覺悟をきめました——

一遍死んで生れ變つて來るよりほかはない。貞代といふものがある以上、自分はきつと生れ變つて來ることが出來る。生れ變つて來なければ、第一彼女に對して濟まぬ。だから此際は潔ぎよく男らしく自ら進んで制裁を受けて來よう。

——斯く覺悟をきめた私は、自轉車を飛ばして直に〇〇〇警察署へ出頭したのでありますが、署長はほんの一足違ひで私の駐在所の方へむけて出かけたと申すことでございます。途中新道と舊道とに分れて居りまする故、そこで行き違つたものかも知れない、と申

すものもございまする。

私は其儘署に待つてゐることが出來ず、念の爲め一筆走り書きの置手紙をして、自分の駐在所へ引き返すことに致しました。自分の留守に署長が待つてゐるかも知れないと考へたからであります。

私の置手紙には簡單ながら、私の公文書僞造一件を包まず自首白狀して置きました。潔ぎよく男らしくと申す中にも、かくして情狀の酌量を仰ぎたいと願ふ心のありましたのは改めて申すまでもないことでございまする。

さてそれから引き返して參りまする途中、私は署長に會ひましたが、署長は全然私の想像したのと別種の用件で、しかも殆んど純然たる私用に近い用件で私を呼んだのでありました。そして電報延着の爲め私の出頭がおそくなつたので、性急な署長は待ち切れず、自分から押しかけて來たのでありました。

私は署へ殘して來た署長宛ての書面を取返さうと、どれだけ苦心したか知れませぬ。しかし乍ら、總ては無益なる努力に終りましてございまする。

そして明治三十九年、私が二十七歳の三月末、私は又もや赤い着物をきせて貰ふことになりましてございまする。

十四　脫獄と其後の犯罪

戸籍の誤魔化し等に對する刑期は四ヶ年でございました。自分では豫期したより長いやうに思ひましたが、しかし何とも致し方がございませぬ。

專ら自首を急いだ爲め、出來る別れをも告げずに來ましたので、入監後貞代からの消息をひとしほ待ちましてございまする。又折々は直接會ひに來ても吳れるであらうと、どんなに樂みにして、首を長くして待ちましたか知れませぬ。

然るに貞代からは、待つても待つても會ひに來て吳れないのは無論のこと、手紙一つ來ないのでございまする。本人がどうかしたのであれば、周圍の者からでも何とか言つてくれさうなものだと思ひましたが、これまた何とも申して來ないのでございまする。

時の經つにつれて、貞代の周圍の者が私如き人間を忌み嫌ひ、憎み恐れてゐるだらうとは流石に氣がつきました。しかしながら貞代の心底は見屆けてゐる筈でありまするし、あれがさう易々と周圍の者同樣の量見になつてしまはうとはどうしても考へられませんでした。そして何處までも一縷の望みを彼女の上に繫けながら、單調にして堪へがたい日を送り、一層堪へがたい夜を迎へてゐたのであります。

それにも拘はらず、貞代からはつひに何の消息も參りませんでした。申しおくれましたが、私からは御上のお許しのありまする限り、貞代へも周圍の人々へも手紙を出すやうにしてゐたのでありまするが、それに對しても何等の音沙汰もなかつたのでございまする。

かくの如き有樣にて、絶望しかけては又思ひ返し思ひ返ししながら、四ケ年の獄窓生活はやつと濟みました。

監獄の門を出るや否や、宙を飛ぶ如くにして懷かしき栃木の〇〇村へ駈けつけたのは改めて申上げるまでもありますまい。日の暮れ方で顏を見られないのを幸ひ、大波の如く高まる胸を押へるやうにしながら、植村の家の裏手の方へ近づいて見ると、先づ聞き慣れぬ子供の泣き聲に驚かされました。次ぎには其子供を聲高になだめ乍ら、行水を使つてゐる女が、まるで見も知らぬ女であるのに一層驚かされました。

それから注意して見まするとと、人間は無論のこと、庭の木や石に至るまで昔の儘でないと思はれるほど、家の樣子一體が變つて居りまする。

暫くはそこに立ちすくんだ儘でゐました私も、やがて思ひ切つて表口から廻つてはひり、納屋の前の暗がりで農具か何かの取片付けをしてゐた男に、植村家の者がどうしたかを訊ねて見ました。

そして其男からきいて見れば、植村の一家は私の一件で、少らず　間體を惡くしてしまつたのみならず、大規模にやつた養蠶の失敗やら、其穴を埋める爲めの投機がかつた商法の大失敗やら、やけ半分の息子の放蕩やらで、色々面白くない事の重り合つた結果、貞代が私の子供を產んでから間もなく、一家を擧げて東京へ出てしまつたと申すのでございまする。又いくばくもなく、殘つてゐた地所家屋等まで全部人手に渡してしまつたと申すのでございまする。

東京は何處にゐるのかと尋ねまするとと、度々轉居された由聞き及べば、現在の御在所は知らざれど、最初ゐられた所は書き留めてある筈と申し、わざわざ帳簞笥の中から搜し出して來て、私に見せましてございまする。しかし、それでは實際の役に立ちさうにも思はれませぬ故、私は遂に決心をして、植村の分家某のところへ參り、植村一家の現在の動靜を尋ねましてございまする。

その某はじめ一家の者共が、如何に驚き、如何に私を扱ひましたかは、一々申述べる必要もありますまい。兎に角そこにて聞き得たところに依れば、植村一家も東京へ出てから後、貸借保證色々の問題でだん〳〵親類共との間に面白からぬ關係を生じ、この二年ばかりといふもの全然消息をさへ絶つてゐる有樣であるが、比較的に新しい住所は、東京市小

石川區原町十七番地であつたと申すのでございまする。

そこで私は早速上京致し、兎も角も右の小石川區原町十七番地を捜して見ましたが、植村一家の者がそれにゐたのは、餘程以前の事なので、それからどちらへ越したかは、近くの人にも差配の處にも分らなくなつて居りまする。

これでも色々苦心奔走の末、植村一家の者が一遍牛込の天神町邊へ引越し、それから又直ぐに、大久保邊の或る荒物屋か酒屋かの裏へ引き越したといふ事を知り得たのでございまする。

そこであの駄々廣い大久保邊一帶の、荒物屋と云ふ荒物屋、酒屋と云ふ酒屋を、片端から殘らず尋ねて歩き、そして其裏に植村一家の者が住んではゐないかと捜して廻つたものでございまする。

捜して廻る内に、もしかしたら植村の本姓を秘してゐるかも知れぬと氣附きましたので、一遍廻つたところを再び廻り直して、かくかくの家族の者が住んではゐないかと聞いたり、あの家にはどんな人が住んでゐるか、家族は幾人かと聞いたりして見たのでございまする。

斯くまでに手を盡しても知れませぬので、殆んど途方にくれたのでありますが、それでもまだ諦めてしまふことは出來ませず、兎に角今一度栃木へ參り、恥を忍んででも植村の緣者と云ふ緣者、知己と云ふ知己殘らずを訪ひ、樣子を探り智慧を借りて見ることにしようと、さう決心してゐましたところ、生憎惡性のインフルエンザに罹り、半月近くを安宿に臥込んでしまひました。

さてインフルエンザが少し宜しくなりましたので、六月の中頃ででもございましたか、右の宿を立ち出で、栃木の方へ參るつもりで上野の停車場まで參り、切符を買はうとしてゐるところを、私は突如に刑事巡査の爲めに逮捕されました。

私は勿論それが何の爲めであるか合點が行きませぬ。しかし、刑事なぞを相手に理窟を申したところで、駄目なものであることはようく知つてゐまする故、出るところへ出るまでなんにも申さないで居りました。

さて出るところへ出て、段々御調べを受けて見ますると、如何でございませう——此私は或る强盜殺人未遂と申す大犯罪の嫌疑者となつてゐたではございませんか？

餘りの意外に、初めは全く開いた口が塞がらないと申す次第でありましたが、直ぐにも晴れると思つた嫌疑がなかなか晴れず、私の申立てを白つぱくれても駄目だぞと喝破しながら、いよいよ御役人方が生眞面目になつて行かれるのを見ますると、私も追々馬鹿々々

しいの度を越して、次第に腹が立つて參りました。

話の順序が少し顚倒したかも知れませぬが、私の嫌疑を受けました犯罪は、將來は兎に角從來はあまり聞いたことのない電氣强盜なるもので、丁度半月ばかり前に西大久保の或る家へ押入る際、其附近の電燈線に電線を繋ぎ、それを長く引いて來て、戸外入口に於て左右に張り、外から駈けつけて來る者に對する防禦に備へ、斯くして置いて仕事に掛つたのでございまする。

そして主人夫婦を脅迫中、女中がこつそり裏口からぬけ出し、大聲に呼ばはつたので、一物をも取らず逃げ去つたのでありますが、變を聞いて早速現場に駈けつけたる最寄の派出所巡査は、右電線に觸れて感電、今少しで生命にも關係したと早す次第なのでございまする。

この事件に關し、私が有力なる犯人嫌疑者となりましたる理由は、第一には丁度あの犯行の前一週間ばかりも、殆んど毎日の如く大久保邊を徘徊してゐたからでございまする。第二には、かの賊の押入つた家を二度までも來てのぞいて行つたのが、たしかに私だつたからでございまする。第三には、右の家から四五軒はなれた表通りの酒屋に於て、右の家の家族一人か、如何なる人々かなぞを、根掘り葉掘り尋ねたのも失張り私らしいからと申

すのでございまする。第四には、私が丁度右犯行時より、二週間ばかり絶對に外出をしないでゐたからでございまする。第五には、はじめて外出するや否や、直に停車場へ駈けつけ、いづれへか高飛びしようとしたからと申すのでございまする。第六には、私が右程度の新式の犯罪をなすに足る學識を有して居り且つ特に從前暫くの間にせよ、電氣器具製造會社に勤めた經驗なぞもあるからと申すのでございまする。第七には私が前科四犯の頗ぶる不信用な人間であるからと申すのでございまする。そして最後に最も有力なる嫌疑の理由としては、犯罪の場所に殘されたる足袋穿きの足跡が、大體に於て私の足跡に近いからと申すのでございまする。

右の如き理由の薄弱なる嫌疑に對しては、勿論私は出來るだけの辨明もし、辯駁をもして見たのでございまする。それにも拘はらず、御役人方はその嫌疑を解いて下さらず、寧ろ愈々疑ひを深くさへなされたらしいのでございまする。

そして隨分日も經つた後思ひ出したやうに、賊のはひつた家の主人夫婦が呼び出され、此漢ではなかつたかなどゝ云ふやうな、氣の利かない御尋ねに遭つたりしたものでございまする。又尋ねに遭つて夫婦の者は、互に顏を見合せながら『身長はもう少し高かつたやうに思ひますが、顏は覆面ながら此顏のやうでございました』と申し、たしかに然うかと

駄目を押されたのに對し、「たしかに此顏でございました。此顏に見覺えがございます」と、私の顏を見い見い口を揃へて、自信ありげに申し立てたものでございまする。

それでもこれなぞはまだ善いとして、私が馬鹿々々しくて我慢出來ないやうに思ひましたのは、かの酒屋の番頭等なるものを呼び出し、かの夫婦の家の事を詳しく問ひ尋ねたのと、此漢であつたかと私を指し示し御役人から御訊ねになりましたことでございまする。私自身さへも、それは多分自分だつたらうと申して居りまする事實をたしかめる爲めに、尙ほこれだけの御手數を御掛けになりまするとは、さて〳〵御役人方と申すものは御閑の多い方々でゐらつしやいまするな。

それにしても、右番頭等が仔細らしく首をひねつて見た揚句、つひに目覺えがないと申立てたのは、今考へて見ましても、聊か滑稽でございまする。

さて斯くのごとく、未決の儘に日を送つて居りまする內にも、私は植村一家の者の事が否、私の子供をさへ產んだと云ふ貞代の事が、心に懸つてならなかつたのでございます。

そして眞夏の或る晩の事でございました。物悲しい蚊の唸り聲を聞きながら、高い窓から綺麗に澄み切つた青天を眺めてゐまするとと、その青天へ明星かなんぞのやうな明るい星が一つ、不意に現れたものでございまする。

勿論これは、私の目の迷ひだつたかも知れませぬが、兎に角その星を見たと思つた瞬間に、私は誰かゞ私を慰めに、いやそんな狹苦しい處から連れ出しに來てくれたかのやうにさう感じたものでございまする。そして私はあの高い窓かまちに跳び付き、それに兩手をかけて、外をのぞいてゐたのでございまする。

序ながら、私はどんなに高い、滑つこい直立面をでも、するすると攀ぢのぼることが出來ましたので、此點では以前一緒に惡事をして廻りました例の女さへも、舌をまいてゐた位でございまする。

處で今、外の景色を見てゐる內にすつかり正氣づいた私が、高い窓かまちから片手をはなし、徐ろに降りようとしてゐまするところを、看守の方に見付かりましてございます。

その結果、私は脫獄を企てたと申すことになり、更に又其結果として、私自ら電氣强盜たることをも承認したことになり、裁判は一氣に進行、終に右眞犯人と決定、九ケ年の懲役を申渡されましてございまする。

このつまらない私の一代記を御讀み下すつてゐる、皆々樣に申上げまする。此場合私の愚痴の一通りをどうか御聽き取り下さいまし。

此私が、そもそもどうして人間の道を踏み外すやうになつたかは暫く措き、一旦ともかくも、世間並の人間に歸らうと思ひ立ち、あれだけの努力をして見たのではございませんか！　それにも拘はらず前科者だと申すので、どうしても人間になれなかつたのではございませんか！

詮方なく前科者の肩書きを削り取る方法を講ずれば、それが又公文書僞造となり、またまた獄窓に呻吟することになつたのでございませんか！

更に共刑期をやつとの事で終つたと思ふまもなく、加之、あれほどまでに心にかゝる貞代等の行方をつき留めもせぬ中に、思ひもかけぬ此寃罪！　しかも九年の懲役とは！　意志の强固な、しつかりとした御人格の方々は如何か存じませぬが、私共如き凡庸愚劣にして薄志弱行の輩が、かくの如き目に遭はされながら、どうして絶望せずに居れませうか？　どうして自暴自棄にならないで居れませうか？

萬事は御憫察下さいまし。これからの私の生涯こそは、もはや人間の生涯ではございませぬ。人間の皮をさへ被つてはゐないのでございまする。

先づ第一に、今度こそは實際に破獄を企てました。

服役一年半あまりを經過したある日の事、仕事場に於てひそかに、、、、、、、折り取り、かねて太股の腫物に醫師より貼布しくれてゐる、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、〇〇〇〇〇〇監房へ歸りました。

そして其日の夜より、御役人の目を盜んではきりもみをしいしい、到頭二十日ばかりで穴をあけ、破獄の目的を達しました。乃ち同監者三人の中の二人は、折角表迄出たところを取押へられてしまひましたけれど、私だけは惡運强く、あらゆる警戒の網をくゞりぬけ、まんまと大都の大波の中へ影を沒してしまつたのでございまする。

破獄脱獄の後も、私は矢張り植村一家の者、特に貞代の居所を探つて見ようと思はないではありませんでした。しかし乍ら、今やそれが薄情な、無情な、冷酷な、人でなしの彼等に對し恨みを晴らしてやらうと云ふ、恐ろしい一念からであつたのは申すまでもありませぬ。

私は彼等を恨んだゝけではありませぬ。私を寃罪に陷れ、自暴自棄の人間にまでしてくれた御役人方を恨んだゝけでもありませぬ。私は人間と云ふ人間、世の中と云ふ世の中が悉く皆自分の仇敵の如く、どうしてやつたら腹が癒えるかと申すやうな心持でゐたのでございまする。

間もなく市外龜戸の某所に於て、はじめて押入强盜を働きましたが、それも衣食に窮し

た爲めばかりではございませんでした。加之私は、私の受けた寃罪の爲め、法廷に於て知識を與へられたる所謂電氣强盜を、その際先づ實地にやつて見たものでございまする。けだし、これを實地にやつて見るのが、一種痛快にも感じられたのでございまする。

但し、この電氣强盜の方は二回目を最後にして止めてしまひました。それは二回目に、自分自身電線に觸れて感電、今少しで屋根から轉がり落ちろほどの危ない目に遭つたからでございます。

電氣をやめてからは、單に針金だけを使用する方に轉じました。即ち、先づ針金を以て家人を片端から縛り上げて置き、それから種々の兇器なり何なりで脅迫强奪するのであります。

斯くして其兇器强盜を働きましたること、その後十幾回か、否幾十回であるか殆んど記憶し切れないほどであります。その間には家人より、若しくは隣人や警官などより、追ひかけられもし斬りつけられもし、又こちらより斬りつけもし、先きを越して斬りつけたり、飛道具を打放したりもしましてございます。

更に、血に渴き肉に飢ゑたる猛獸の如き私の心は、婦人の白い肌を見ると、忽ち牙を鳴らして飛びかゝり、ずだ〳〵に引き裂き嚙みしやぶり、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

した。私は全く人間ではございませんでした。人間でないものになつてゐたのでございます。

それらの恐ろしい罪惡の數々を、記憶の限り詳細に書き記しまするのは、世の爲め人の爲めあまり御益に立たうとも思はれませぬ。加之、私自身としましても、かなり氣乘りのせぬ事なのでございまする。

それ故次ぎには、私一生の勘定仕舞ひを致しまする上に、どうしても逸するわけに行かぬ『鈴ケ森お濱殺し』と『程ケ谷在夫婦殺し』との二大犯罪だけを、一通り書き記して置くことに致しませう。

即ち、不思議な事から兄弟の如き仲となり、三四年來幾度となく惡事を共にした人間に、關口某と申すのがありました。それと暫く別々になり、專ら關西方面を荒らしてゐた私が、大正四年四月二十三日ハ々上京、本所の某所に於て、表面上洗濯屋を渡世に致して居りました右の關口を訪ねて參りますると、關口は賭博に敗けて金に困り、私が遠國から盜んで送つた品物なぞも、全部賣拂つたり質に入れたりしてゐました。それでも彼は、賭博に負けたとは私に申し憎いかして、米相場で損を致したと申しましたのを、今以て可笑しいことに思つて居りまする。

兎も角も、關口は餘程閉口してゐたと見えまして、私が上京した翌々日、私に向つて『岩井さん、俺も今日ではすつかりヘコタレてゐるんだが、何とかなるまいか』と申しまする。私も氣の毒に思ひまして、『何とかして見よう』と申したのであります。

そこで其晩からでも早速稼ぎに掛つてやらうかと思ひましたけれど、東京附近でやつては關口の妻子等が可哀さうと、大惡人ながらかねてさう思つて居りますること故、それから三四日を經つた四月二十九日の朝、靜岡邊まで遠征のつもりで立ち出でました。

けれども、何故か其日は氣乘りがしなくなり、靜岡への遠征を見合はして横濱に下車、横濱の市中をぶら〳〵と一周り致してから、東海道を遊びがてら歩いて歸らうと思ひ、鈴ヶ森まで參りましたのは、夜のもう十時過ぎ頃でございまする。私がその掛茶屋の腰掛けにかけ、一服やつて居りまするところへ、一人の若い女が通りかゝりました。弱々しい街燈の光と朧月の光とで、黑い襟のかかつた着物をきた、色白の圓顏の、二十四五位の女だなと見て取りました。しかし最初はさう見て取つただけの事でありましたが、私の前を通り過ぎる際、その女が私のゐたのに心付き、急に足を早めてすたすたと駈け出したとき、私は不意に妙な氣になりました。

そして直ぐに吸ひ寄せられるやうにして女を追ひかけ、女の體に手をかけますると、女は唐突に『人殺し』と叫び立てました。

此聲が再び私の、、、、、しましたが、私の聲の立たないやうに女の首へ手拭を卷きつけ、、、。乃ち詮方なく手拭をきつく引き絞りまするど、呼吸がとまつてしまひました。

やがて、、、、、、、女の袂から蟇口を引き出し、中を檢めて見まするど、金がとりまぜて三十六圓、そのほかに極彩色の手の込んだ、、、が一枚ありましたので、其儘取つて置きました。

それから氣が付いて、、女の情夫かなんかゞ、怨恨にて殺したかのやうに見せかける爲め、その場をしかるべく取繕つて置きました。此事の爲めに、小栗と云ふ人が寃の罪に落ちかかり、數ケ月の間獄中の人となりました顚末は、後ほど改めて申上げまする。

偖て私は三十日の朝、關口の家へ歸りまして、何喰はぬ顏をして四五日遊んでゐましたが、五月の六日に再び靜岡へ遠征を企て、靜岡より名古屋へかけて數回の强盜强姦を働きました。そして五月中頃にかなりの土産を持つて關口の家へ歸りました。

その後六月の十四日頃に、又々遠征を試みることに致し、汽車で出掛ける途中横濱に下

車して見る氣になり、それから程ケ谷まで徒歩して參りましたるところ、その邊に一箇所仕事の出來る見當がつきました。そこで横濱まで引き返して機會をうかゞひ、十八日の夜右程ケ谷の或る家へ忍び込み、例の如く針金で主人夫婦を縛り上げ、有金を出せと脅迫したものでございまする。

然るに主人は金なしと言ひ張りまする故、主人を柱へ括り置き、細君をつれて次ぎの間へ出ましたるところ、主人は細君を汚されるものと早合點したものか、唐突に盜賊々々と叫び立てました。これは流石の私も狼狽して、主人のところへ取つて返し、其場に有り合せたる手拭にて首を絞めました。それを見て細君も精一杯の大聲をしぼり上げ、人殺し人殺しと絶叫し出しました。そこで又々其場にあり合せたる細帶にて細君の首を絞め、遂に二人とも殺してしまひましたけれど、間もなく、周圍が騷がしくなつて來ました故、金や品物を持ち出す餘裕はなく、唯だその場に在りました女持ちの時計一個だけ盜んで出て來たのでございまする。

十五　自首して出ても悔悟せず

『程ケ谷在夫婦殺し』の後、元吉原、岩淵、濱松、豐橋、岡崎と次ぎ次ぎに東海道筋を荒らしながら、大阪から神戸まで參りましたところ、急に兩眼をわづらひ出し、眼藥など買ひ求め差して見ましたけれども全快いたしませぬ。そこで關口の所より旅費を送らせ、十月末に一先づ東京へ歸つて參りました。

歸つて見ますると、關口の奴は又々賭博でゝも失敗しましたか、お話にならぬほどに窮迫をして居りまする。私から送つた品物は無論の事、妻子等の着物まで入質して、一同着替もなくなつてゐると云ふ有樣でございまする。

斯樣な有樣故、私も座視するわけに行かず、さればとて眼が悪いので一人で遠國へ出かけるのも心細く、かた〳〵關口のすゝめる儘に、東京の内で關口と一緒に悪事を働くことに致しました。

その結果は、かねがね私の氣遣つてゐた如く、二人とも關口の家に安閑としてゐられなくなりました。そこで相携へて高飛びすることに決定したのでありますが、愈々今日あたり立たうと云ふ十二月八日の朝、一寸用達に出て歸つて見ますると、刑事巡査が五人で待ち受けて居りました。そしてわけもなく警察へ引張られて行きました。

けれどもそれは、私共の實際に犯したのでない、何か下らない犯罪の嫌疑らしいので、私は直ぐに歸つて來られるだらうと思つて居りました。

ところが、警察の拘留監へ入りますると、そこには七八人の犯罪者嫌疑者が居り、色々の話をし合つて居りまする。やがて東京市中の殺人犯の話なぞも出まして、何處其處の人殺しはまだ犯人の見當もつかないさうだが、何々の人殺しは捕縛になつたなぞと云ふ話になりまする。

そんな話を聞くともなしに聞いてゐると、一人の男が、『鈴ケ森お濱殺し』の話をしだしたものでございまする。この一語をきいては、流石不敵の大悪人なる私も、はつと思ひました。そしてどんな話をするかと聞耳を立てたのでございまする。

『愈々公判になつたな』と右の男が申しまするとと、『だが、あれでゐて自白してしまはねえたあ、往生際の悪い野郎ぢやねえか』と誰かが申しまする。

これを聞いた時の私の驚きを御察し下さい。お濱殺しの犯人は、別人ならずこの私自身ではありませんか。しかるに今私以外の何人かゞ犯人になり、公判に附せられてゐると云ふ話ではありませんか！

『お濱殺しの犯人がつかまつたんですか！』と、私はその連中の誰にともなく問ひたづねました。

『つかまつたか？　お濱殺しの小栗を知らねえのかなあ』と或る男が申しました。

『ずつと田舎の方に行つてゐて、それに新聞を暫く見なかつたものだから』と、申して私は改めて詳しい説明を求めました。さうしてはじめて知り得たるところに依れば、殺されたお濱と二二度情交のあつた小栗久輔と申す若い人が、私の犯した罪の爲め寃罪を被り、十目の見るところまぎれもなき眞犯人として、ずん〳〵裁判が進行してゐるところなのであります。

この話を聞いた時の私の胸中は、到底私の拙い筆には書き現はすことが出來ませぬ。否、只だに書き現はすことが出來ないのみならず、正直に申せば何が何だか分らないほどに感動してしまつたのでありました。

今日より考へて見まするのに、犯罪のあとで、女が情夫にでも殺されたやうに見せかけやうとたくらんだ位の私故、小栗といふ若い人に對して濟まぬ事をしたと感ずるわけはありませぬ。よし多少は左樣に感じたところで、又氣の毒な事だと同情したところで、それだけで直ぐに此私が『鈴ケ森お濱殺し』を自首して出るほどの、大決心を致すわけはございませぬ。

私は小栗といふ人の寃罪に落ちてゐるのを眼前につき付けられて、今更の如く自分自身の被れる寃罪の恨みを思ひ出したのであります。そして小栗の地位に現在自身が立つてゐ

るかの如く感じ、胸も張り裂けんばかりに憤慨したのであります。そして自分が自首して出なければ、小栗が殺人犯人として處刑されてしまふべき處を、自分が眞犯人として名乘り出てやつたら、平生から……を働いてゐる……の『態あ見あがれ！』である。こんな痛快なことはない。と、さう云ふ腹になつてゐたのであります。

やけ糞に荒れ廻つてゐる體とて、どのみち碌な死にかたをするものではなし、そろ〳〵もう年貢の納め仕舞ひにしたところで大した未練もない。ところで此自首一件で以て、阿呆面の世間にもあつと言はしてやり、恨み重る……にも一泡吹かしてやれるなら、こいつ本當に死時かも知れないと、全くさう云ふ腹になつてゐたのであります。

かくの如く命懸けの復讐を思ひ立ちまするとと、矢も楯もたまりませぬ。警察署の中にて『鈴ケ森お濱殺し』を自首、委細に亙つて申立てました。そこで此監獄へ送られて來ることになりました。それは大正四年十一月二十日のことでございまする。

偖て大正四年も間もなく暮れ、五年の元日の朝になりまするとと、私の處へお辨當の差入がありましたので、私は役人に向ひ、これは何と云ふ御方からの御差入かと伺ひました。すると御役人は、ティイラアと云ふ基督教の傳道をなさる方からの御差入だとの御答へでございました。

知らない人からさうした同情を受けるのが、その場合の私にあまり嬉しくもなく、又何となく耶蘇嫌ひでもありまするし、一應お斷りして見たのでありますが、お役人からウルサクくど〳〵と分り切つたことを說き聞かされるのが面倒さに、遂に我を折つて受けることになりました。

それから三四日經つた處で、又もや右のティイラアと申す人から新約全書及び基督教の小冊子五六部を差入れて下さいましたが、私は勿論棚の上に置き、手に取つて見も致しませんでした。

それから更に幾日か經つた處で、ある日右のティイラアと申す人が直接私の處へ面會に來て下さいました。御目に掛つて見てはじめて御婦人の方であることを知りました。そして誠に失禮な事ながら、御目に掛つた瞬間に、此人はどつか亡くなつた私の祖母に似てゐるなと、さう思ひました。

さう思ひ乍ら私が、御差入を頂いた御禮を申しまするとと、ミス・ティイラアは殆んど日本人と異はないやうな流暢な言葉で、私が自首して出たことのけなげさを御賞めになり、それから次ぎのやうに仰しやつて下さいました——

『貴下はまだ神樣を御存知ありません。けれども神樣は貴下を御招きになつてゐらつしや

います。もはや、救ひの御手を貴下の上に伸ばしてゐらつしやいます。それ故、貴下が自分の罪を自首して出ること、出來たのです』

私は何とも申すことが出來ず、唯だ默つて伺つて居りました。するとミス・ティイラアは愈々熱心に仰しやるのでございまする――

『しかし、自分で自分の罪を悔いてゐる人が、神樣を知らないでゐるのは大變恐ろしい事です。貴下は自分の罪を贖つて貰つて、望みを有つた方にならなければいけないのです』

それから尙ほ引き續き、色々に有りがたいお話をなすつて頂いたのでございまするが、私の耳には殘つて居りませぬ。そして私が餘り熱心に伺つてゐないことに、やうやく御氣附になりましたミス・ティイラアは、その日はよい加減にして御歸りになりましてございまする。

その後二度三度と引きつゞき面會に來て下さいまして、同じく有り難い御話を御聞かせになりまするが、頑迷不靈なる私は、たゞそれをウルサク思ふ位のもので、遂には思ひ切つて、こんな無遠慮な事まで申上げたものであります――

『私は成程色々な惡事を働いても來ましたが、それを心から惡いとは思つちやゐません。もしも私が惡いなら、私に惡い事をさした奴は一層惡いでせう』

『それは誰でございませう？――貴下に惡いことをさしたのは！　それは神樣だと仰しやるんですか？』

『いや、神樣の事なんぞあんまり考へて見ません』

『貴下、御父樣がありますか？』

『私の子供の時分に死にました』

『御母樣がありますか？』

『生きてゐるかも知れません』

『どうして、そんな事――』

『母もずつと昔に愛想をつかして呉れ、私ももうすつかり忘れてゐるんです』

『奥樣は？　御子樣はありませんか？』

私は再び口をつぐんでしまひました。その時の私の樣子が餘程どうかして居りましたかミス・ティイラアは非常に驚いたやうな口調で仰しやいました――

『私、日本語が自由に出來ません。何か失禮な事を申し上げましたか？』

『私は自分が惡いとは思はない！　他の奴等が惡いんだ！　みんなで寄つてたかつて、此私を、こんな人間にしてしまつたんぢやないか！』

――ミス・ティイラアへとも、自分自身への獨語ともつかず、嚙んだ物を吐き出すやうに申しました。

『さうですか。貴下自首して出ても、悪い事したと思つてゐないですか？』

――ミス・ティイラアも斯う言つて、しばらくの間口をつぐみ、默つてぢつと私の顏を見つめてゐらつしやいました。やがてほつと太息をついて、時計を出して御覽になり、それから次ぎのやうに言つて置いて御歸りになりました――

『私、信仰足りない爲め、神様の思召を貴下に解つて頂くことは出來ません。恥づかしいです。また參ります。失禮しました』

自分の犯した罪を自首して出る者は、悉く悔悟者であるときめてしまふのは所謂宗教家の方々ばかりではないやうであります。學校出たての御若い司法官の方々なども、自首者は悉く悔悟者であるといふ風に無造作に考へてゐらつしやるのが少くないやうであります。

そして私の場合にも、私が眞犯人であるならば、それを自首して出る以上、心から悔悟したものでなければならぬ。しかるに宗吉の獄中法廷等に於ける言動態度を見るに、聊かも悔悟した者の如き殊勝なる、恐れ入つたらしいところがなく、むしろ司法官等を侮辱し、挑戰的な態度をとつてゐるやうにさへ見えるのである。かくの如きはどうしても、彼が眞犯人ならざる證左の一と見なければならぬと、先づ斯う云つたやうに御役人方も御考へになつたらしいのであります。

それかあらぬか、私があらゆる事實を陳述して、自ら眞犯人たることを證據立てようと努力致したにも拘はらず、第一審に於て私は無罪の判決を下されました。

私はお役人の馬鹿さ加減を遺憾なく暴露したものとして、一面溜飲を下げながらも、結局自分が眞犯人として承認されなければ、お役人共を世間の物笑ひにすることが出來ませぬ故、これは、どうしても有罪にして貰はねばならぬと思ひました。そして自分がお濱殺し犯人たることを主張する上に、愈々躍氣になり、意地になつて來たのでございまする。

そこで私は、第二審の要求をなすと共に、どうせ序だからと思ひ、『程ケ谷夫婦殺し』の大罪をはじめとして、自ら記憶してゐる限りの犯罪全部を自首して出ました。一には斯くすることに依つて、それでは鈴ケ森事件の眞犯人たることも事實であらうと、御役人達に考へ返さしてやりたかつたからであります。

やがて私は横濱監獄へ移され、横濱地方裁判所に於て審理の末、『程ケ谷夫婦殺し』の犯人として死刑を宣告されました。

それから再び東京監獄へ護送。お濱殺し事件の第二審開始をまだかまだかと待つて居り

ましたが、ある日のこと、またもや誰からともなく私へお辨當の差入がありました。不思議に思ひ、お役人にたづねて見ますと、植村と云ふ人からの差入であると申します。

植村と聞いて私は、脈管の血が一度に流れをとめてしまふほどに興奮致しました。しかし、お役人を相手にどうも出來ませぬ故、私はたゞ右お辨當を受けませぬとだけ、斷乎として申しました。

恰度その翌日訪ぬて來られたミス・ティイラアは、右お辨當を斥けた話を御聞きになつたものと見え、私に向ひ『何故人の深切を受けません』とお尋ねでございまする。

此頃はもうだいぶ心易く親んでゐました事故、私はミス・ティイラアへ私と植村一家との關係を一通りお話しました。ミス・ティイラアは、別に何とも仰しやいませんでしたが、私の怨み憤つてゐる心持は、幾分御察し下すつたやうでございました。

すると三日ばかり經つて、ミス・ティイラアが又々御訪ね下すつた時、その方は私の顏を見るより早く仰しやいました——

『私、植村さん、あの方の奥樣にも會つて來ました』

私は默つてゐました。ミス・ティイラアは微笑を洩らし乍ら御續けになります——

『あの方々も、貴下に對して、大變に濟まないことをしたと仰しやつてゐます』

私は何をあの厚顏な奴等が言つたのかと、さう思ひながらきいて居りました。

『それに、あの方々の娘さん、貞代さんと仰しやる人、一番御可哀想です。あんまり御可哀想な話です！』

『貞代がどうしたのです？』と私は、覺えず膝を進めました。

それからミス・ティイラアは貞代の所謂『御可哀想な話』に就いて、植村夫婦から聞き知つた事柄を、詳しくお話しして下さいました。

そのお話しに依れば、植村一家の者が柄木にゐました間は、貞代は獄中と消息の通じられることを、全く知らなかつたのであります。會ひに行けることなぞは、夢にも思はなかつたのであります。なぜと云つて、周圍の人々が然う思はせて置いたからであります。

たゞに手紙が出せないと思ひ込んでゐたのみならず、貞代は私からあれほど度々出した手紙の一本をも、途中でかくされてしまつて、つひに見ることが出來なかつたのであります。

兩親と弟と四人連れで上京の後は、誰から聞かされるともなく、獄中との消息交通のことを聞かされてゐましたので、こつそり抜け出して、獄中の私へ會ひに來ようと企てました。しかし其企ては脆くも失敗に終りました。

その企てが失敗に終ると共に、貞代は出入を嚴重に監視され出し、遂には一室に監禁されてしまふまでになりました。

斯うなるまでに彼女が、どんなに情神上健康を損じて參りましたかは、改めて申上げるまでもありますまい。殊に生れるとから乳が不十分であつた爲めか、兎角に虚弱であつた男の兒が生後十五ケ月ばかりにして亡くなりまするとと、彼女は殆んど純然たる精神錯亂に陷りました。

植村の者が屢々居を移しましたのは、經濟上の理由なぞよりも何よりも、貞代の病氣の世間體を持てあましたからの事でありました。

貞代は最後に大阪桃山の某精神病院へ入院させられ、四ケ月ばかりといふもの醜い狂亂の限りを盡して遂に果敢なくなりました。

それより先き、一人息子なる義一は放蕩無頼となつて遂に行方も不明になり、親戚知己のたよるべき處をもわれからと無くしてゐた植村夫婦は、今遂に貞代の殘骸をも灰にしてしまふに至つて、眞に寂寥の感に堪へがたくなりました。

そして一日天王寺横――そこには此宗吉が昔母や祖母と住んでゐたのであります――の或る巫女の處へ參り、亡くなつた娘の靈を呼び出して貰ひましたところ、娘の靈は何よりも先きに、私に會はないで死んだことの恨みを申し、それから娘自身が死ぬまで私の事を思ひつゞけてゐたこと、あんな氣狂ひになつてまでも、心の底には私の事ばかり思ひつゞけてゐたことを申し、更にこの事を是非々々私に傳へてくれと、繰返し繰返し涙ながらに申したのでありました。

――斯う話し傳へながら、ミス・ティイラアも涙を流してゐらつしやいました。私は餘りにも待ち設けなかつた話なので、直ぐには貞代を可哀想とも何とも思ふことが出來ず、殆んど無感覺のやうな狀態になつてゐました。その癖ミス・ティイラアの一語一語をも聞き洩らさずに聞いて居りました。

偖てそのあとを聞いて見ますれば、貞代の兩親はさなきだに私に對して濟まないと云ふ氣持にもなつてゐたことなり、貞代の靈の希望は是非々々叶へてやらねはならぬと、さう思ふには思つたのでありまするが、それにしても彼等はうかうかと私に會ふことの危險を考へないわけに行かないのであります。なまやさしい事で、私の恨みを和らげられようとは、沛石に考へられなかつたからであります。

さうして私の行方を捜さうとしないのみならず、今度お濱殺しの自首騒ぎまで起りましても、尙ほ植村夫婦の者は私の前に姿を現はすことを恐れてゐたのでありますが、先日程

ケ谷夫婦殺しの事件が決定、愈々それだけでも死刑と定まりましたので、やつと私の處へ差入をして見るだけの勇氣を出したのであります。

――この長いお話の末段へ來ては、ミス・ティイラアは折々御自分の言葉を切り、私からの言葉を御待受けになりました。けれども私は何にも言葉をはさむことが出來ませんでした。

愈々最後にミス・ティイラアは、『まだ大切なお話が殘つてゐます』と仰しやつて、植村夫婦がせめては私の生みの母とやらを搜し出し、それを通して私へ詫びて貰はうと思ひ立つたこと、色々搜して見た結果母はもう十年ばかりも前に死んでゐたけれども、その良人であつた人から色々の話をきいたこと、即ち、母が終始一貫私に愛想をつかすどころでなく、私のことばつかり心にかけてゐたこと、臨終にもそれだけが心にかゝると言つたことなど、詳しく御傳聞の儘を御傳へ下さいました。

（宗吉は此次ぎに、母が昔自分を疎んじたと思つたのが、大きな誤解にほかならなかつたといふことを、十頁近くに亙つて詳述してゐる。けれども此事は、もつと始めの處で一遍取次いで置きもしたし、かたがた重複の嫌ひがあるから削除することにしよう）

偖てミス・ティイラアの御話は遂にお仕舞ひになつてしまひましたが、それでも聞き終つて私は何とも申すことが出來ませんでした。私は全く舌がなくなつてしまつたやうでございました。そしてミス・ティイラアは、啞のやうにたゞ默禮ばかりしてゐる私を殘して置いて。けれども別に御機嫌も惡くなさらずに御歸りになりました。

ミス・ティイラアの御姿が見えなくなり、御足の音が聞えなくなつた頃、私は意氣地なくも女子供のやうに泣き出しましてございまする。聲を立てゝまで泣きましてございまする。

しかし、其日も其翌日も其翌々日も、私はなにも申すことが出來ませんでした。お役人方が御見えになりましても、ミス・ティイラアが又々御訪ね下さいましても、私は依然として啞の如く、たゞ默禮を以て迎へ、默禮を以て送るだけでございました。そして自分ひとりになるのを待ち兼ねて、いつもいつも泣いてばかり居りました。

これより後私がどうなつたか、私の心がどう變つたかは、くど〳〵しく申上げる必要もありますまい。

極々簡單に申上げると、やつと口が利けるやうになりましたところで、私は植村夫婦に會ひました。いゝえ、私から賴んで會はして貰つたのであります。

その節貞代の父は、『濟まなかつた』と眞心から申しました。貞代の母は、『これで娘も浮ばれます』と、これまた嬉し泣きに泣き乍ら申しました。

その後間もなく開かれましたる第二審の法廷に於ては、私がこれまでとまるで變つた態

度を取りましたので、あまり多くの事を申立てないにも拘はらず、申上げる限りは悉く御取上げになりましたやうに思はれまする。

そして此大正七年四月十一日公明なる御裁判により、鈴ケ森お濱殺しの犯人として死刑の宣告を受けましたるは、恐らくまだ皆々様の御記憶に新なる所であらうと存じまする。

特に第二審開始の頃からは、色々の方が色々の有難い書物なぞを差入れて下さるのみならず、教務主任のS様は小説講談の類まで讀んで見よと仰しやつて、色々御貸し下さいましてございまする。

失禮乍ら、それらの物にも讀みあきた時、折々例の聖書を棚から取つて、讀むともなしにめくつて見て居りましたが、ある時偶然にも次ぎの一句が目に留りました——

『イエス曰ひけるは、父よ彼等を赦したまへ彼等はその爲すところを知らざればなり』

此一句が妙にその時の私の興味をひきましたので、私はそれより少し前から改めて讀み返してみました。

そしてそれは、イエスと申す人が何等の犯せる罪もなきに寃の罪にて十字架につけられるとき、彼をさうして十字架につける人々、謂はゞ自分の仇敵の爲めに、神様へ罪の赦しを求めて御遣りになつてゐたのであると分りました。私がイエスを、キリストを神の子であると信じまする爲めには、たゞもう右の一段を繰返し讀まして頂いたゞけで十分でございました。

（このあとに、だいぶ長い宗吉の宗教的感想が述べてあるけれども、宗吉の生涯その物ほど、傳記その物ほど私共にとつて興味のあるものでないやうに思つたので、宗吉には濟まないけれども削除することにした）

勿論私は、ミス・ティイラアや教務主任S様や、その他の方々の御導きに依り、やつと信仰の入口まで入れて頂いたに過ぎませぬ。皆々様の仰しやつて下さいまするやうに、決して生れ變つたやうに立派な人間にもなんにもなつては居りませぬ。クリスティアンの中のクリスティアンであるなぞと仰しやつて頂くのは、誠にもう汗顏の至りでございまする。

（宗吉の草稿は、このあとに一行書いては消し、三四行書いては又丁寧に棒を引いて消し、かくして結局何も書き續けられてゐない。所謂自傳の結末としては、聊か體裁をなしてゐない觀がある。或はまだ、何か書き落した事柄でも、書き足して置くつもりであつたかも知れない。さうで無かつたかも知れない）

（餘事ながら、宗吉が絞首臺上にのぼつた時、天國へ旅立つのだと言つて、喜色滿面勇み立つて

ゐたとも傳へられ、或はまた何とか云ふ辭世の歌を口にしながら、從容として死に就いたとも傳へられてゐる。しかしながら、現場に立會つた友人S君から、私の聞いた處によれば斯うである

―

かれがれ腰折のやうなものを作つてゐた宗吉の事だからと思ひ、S君が彼に向つて、何か辭世の句とでも云ふやうなものは出來ないかと聞いて見た。すると宗吉は「さうですなあ」と言つて、少時の間頭をかしげてゐたが、やがて苦笑ひしながら言つた「どうも心が落ちつかないので出來ません」と。そしてそれつきり目をつぶつてしまひ、何物をも見ず、何をも言はないでしまつたのである)(了)

大正十二年五月三日印刷
大正十二年五月五日發行

哀史

著者　哀史　生田長江
發行者　松岡虎王麿
印刷者　東京市牛込區原町一丁目二一番地　福原貞次
發行所　麹町區飯田町四丁目三番地　近代名著文庫刊行會
振替貯金　東京六二四八七番
發賣元　麹町區飯田町四丁目三番地　南天堂出版部
振替貯金　東京五三八六四番

定價五拾錢

（文華堂印刷）

近代名著文庫

各編二百頁乃至三百頁

價五拾錢 送料四錢

(1) **努力論** 幸田露伴著

(2) **社會主義批判** 室伏高信著

(3) **二階の窓** 正宗白鳥著

(4) **懺悔** 附内的生活の發展 トルストイ著 百島操譯

(5) **宗教生活と哲學** 波多野精一序 佐藤繁彦譯

(6) **舞踊論** 坪内逍遙著

(7) **貧しき人々** ドストフスキー著 木村信次譯

(8) **近代名詩選（第一）** 近代詩研究會編

(9) **萌出るもの** 德田秋聲著

(10) **神になる意志** 杉森孝次郎著

(11) **墨汁一滴** 正岡子規著

(12) **カルメン** メリメ著 生田長江譯

(13) **近代名詩選（第二）** 近代詩研究會編

(14) **百日紅** 田山花袋著

(15) **住心地よき中流住宅** 大野三行著

(16) **靈性の危機** 植村正久著

(18) **近代名詩選（第三）** 近代詩研究會編

(19) **小説哀史** 生田長江著

(20) **エチュード心理學** 田中王堂 西山庸平譯

＝定價各冊五拾錢＝

各編三百頁以下續々刊行

389
82

終